戯曲
ディオニュソス
―闇の神性―
I
正道
SEIDOU

目次

ディオニュソス　闇の神性Ⅰ

はじめに 3

前史 4

全体の目次 5

第１章　ザグレウス

登場人物 9

デメテルの神殿 11

翌日、同じ神殿にて 13

姉と弟 15

イダ山の洞窟 18

三日後の同じ洞窟 20

真夜中の来訪者たち 22

アテナとシレノスだけが残った洞窟 30

オリュンポスの宮殿 31

第２章　セメレー

登場人物 37

夜の逢瀬 38

オリュンポス神殿 40

カドモスの王城、セメレーの部屋 42

最後の逢瀬 46

オリュンポス神殿 49

夜、カドモスの王城 51

第３章　子鹿と葡萄酒

登場人物 57

ニュサ、ニンフたちの村 58

談話 62

ブドウ畑 65

第４章　イノーとアタマース

登場人物 71

荒野 73
オルコメノスの王宮 76
王家の団らん 80

ディオニュソス　闇の神性Ⅰ

はじめに

ディオニュソスは、ギリシア神話における葡萄酒の神さまです。

この神には他に、狂気の神、舞踏の神、音楽の神、また哲学者ニーチェが信奉したニヒリズム（ 虚無主義 ）の神、といった側面もあります。となれば、ギリシア神話の神さまの中でも、とりわけ複雑怪奇な存在だと言っていいでしょう。

本書においては、この複雑な神さまの誕生期から青年期までのエピソードを集めています。これを換言すれば「誕生したディオニュソスが、自分自身の本質を見出すまでのエピソードを集めている」という言い方も出来るでしょう。

つまり本書は、ディオニュソスという神の成長物語なのです。

文章の形式としては戯曲（ シナリオ ）のスタイルを採用しています。これはギリシア悲劇（ 演劇 ）の主催神でもあるディオニュソスを描くには、もっとも相応しい形式なのではないかと思います。

なお、率直に言って本書は、読者に対し、ときに卑猥でグロテスクな印象を与えかねない作品であります。

といってもディオニュソス神は、もともと晴朗なるギリシア世界の影の部分、闇の部分を代表する神。この点ばかりは、どうかご容赦いただきたいと思います。

前史

二柱の大神、クロノスとゼウス。クロノスは親であり、ゼウスはその子である。

この親子の世代交代劇は、ひとつの戦争となった。十年ものあいだ続いた巨神戦争＝ティタノマキアである。

クロノスはティターン神族と呼ばれる巨大な神々を率い、ゼウスはのちにオリュンポス神族と呼ばれることになる神々を率いて戦った。そして、その軍配は、最終的にゼウスの側に上がった。つまり世代交代が成ったわけである。

負けたクロノスたちはタルタロスと呼ばれる地下世界に押し込められ、地上や天空は、勝ったオリュンポス神族が治めることになった。

なかんずく、その統治の中枢となったのが、オリュンポス十二神と呼ばれる、ゼウスを中心とした十二柱の神々である。その名を列挙すると、ゼウス、ヘラ、ポセイドン、ヘルメス、デメテル、アフロディーテ、アポロン、アルテミス、アテナ、アレス、ヘパイトス、ヘスティア、ということになる。

ただし竈〔かまど〕の女神ヘスティアは、のちにその座を、新しい神ディオニュソスに明け渡すことになる。本書は、そのディオニュソスについての物語である。

全体の目次

第１章 ザグレウス

第２章 セメレー

第３章 小鹿と葡萄酒

第４章 イノーとアタマース

第５章 ティーシポネ

第６章 イルカになった水夫たち

第７章 シレノスとの再会

第８章 大地母神キュベレー

第９章 虚無への降下

第 10 章 無からの創造

第 11 章 ヘルメス・トリスメギストス

第 12 章 曙光

第１章　ザグレウス

登場人物

ゼウス　オリュンポス神族の中心にあって、全知全能と崇められる。しかし浮気をしては妻ヘラに詰られている情けない部分も目立つ。鷲がゼウスの聖鳥。

ヘラ　ゼウスの妻で、女神の中では最高位に立っている。正当な結婚と子供の守護神。それだけに家庭を蔑ろにする夫の浮気には、たいへん敏感である。

デメテル　農耕と豊穣の女神。彼女に見守られていなければ、地上の植物は、まったく繁殖することが出来ない。乳と土の匂いがする大地母神。

ペルセフォネー　デメテルの娘。母親とまったく分かちがたく結びついている。つまりマザコン。母親の言うとおりにしか生きられないし、母親がいないと不安で仕方がない。

もちろん彼女には、父親の厳しさに導かれて自立に達する、といった成長の方向性はまったく望めない。なにしろ父親がゼウスである。この事実は、本編の冒頭において忌まわしい前提となるが、神々の近親相姦を云々しても詮なきことである。

アテナ　ゼウスとメティス（ 知恵の女神 ）の子。ゼウスは、とある神から「メティスが生む子が男児ならば、その子はお前に取って代わる大神になるだろう」と予言された。そのためゼウスは、妊娠中だったメティスを飲み込んだ。彼女が子供を産めないようにしたのである。

しかし、それからしばらくすると、激しい頭痛がゼウスを襲うようになる。かかる激痛に耐えかねた大神は、息子のヘパイストスに命じて、自分の頭をかち割らせた。すると割れた頭から、すでに成人している姿でアテナが生まれた。

彼女は武装もしており、このことから明白なように、アテナは生まれついての戦神である。また彼女は知恵も司る。なお、生まれたのが男児でなかったことから、かの予言は効力を失った。

ザグレウス　死と再生を経るまえのディオニュソスの名前。本編の主人公。

シレノス　髭を生やした老人で、馬の耳、足、尾をもった半神半獣。醜いが知恵者である。ここではザグレウスの世話係。

ピロテス・モモス・タナトス　ティターン神族。いずれもニュクス（ 夜 ）の子。ピロテスは愛欲、モモスは非難、タナトスは死の擬人化。

☆ **ハデス**　地下冥界の神。ゼウスの弟でもある。本編とは関わらないが、のちにペルセフォネーを誘拐し、自分の妃にしてしまう。

☆ **ヘルメス**　商売、盗みの神。早熟なこの神は、生まれたその日にアポロンの牛を盗んでいる。

☆ **ヘパイストス**　鍛冶と発明の神。

☆は、本編には直接登場しない人物、神。

デメテルの神殿

　薄暗い神殿の柱廊、ゼウスがペルセフォネーに迫っている。

ゼウス　デメテルの娘よ、つねに母に追従して生き、ゆえにその心に自分の意志を育み忘れてしまった娘よ。ペルセフォネー、ためにお前の心は空虚なり。ただの空虚なり。しかし、その我を持たぬがゆえの清らかさよ。怯えた美しさよ。弱きものの嫌らしいたおやかさよ。お前はなんと魅力的な女であることか。

ペルセフォネー　私から離れてください。

ゼウス　無理を言うな。男は、お前の虚ろな心のうちに、己の「理想の女」を見いだすのだ。理想を傷つける現実は、つまりお前自身の個性や自我は、その心のうちに存しておらぬからな。お前は、男の理想をすべて受け入れる空虚な器なのだ。いや、男の心を引き寄せて吸い込む蟻地獄なのだ。なのに、お前には、こうして迫る男の暴力を跳ね返す力もない。おお、弱き処女よ、清らかなる娼婦よ。

ペルセフォネー　大神よ、その手を放してください。なぜ、そのような眼で私を見るのです。私が母の隣にいるときには、礼を尽くして、私に対しても優しくしてくれるものを。それが、母がいなくなったとたん、このような乱行に及ぶなんて。

ゼウス　私は鏡に過ぎぬ。各々の心のありようを現実として映し出す鏡に過ぎぬ。私がこのような気持ちになるのは、お前の心にある本質が、それを呼び起こしたからだ。進んで私が望んだことではないのだ。

ペルセフォネー　なにを馬鹿な。

ゼウス　その証拠に、お前は将来、また今日と同じような目に遭うだろう。お前は乱暴にさらわれ、捕らえられ、そうして一切の自由を奪われるのだ。もともと自由を持っていないがゆえに。自分に由るものを、自我や個性を持っていないがゆえに。

ペルセフォネー　そんなこと信じません。

ゼウス　これは確かな予言なのだよ。お前は自由を奪われる。いま私にされているのと同じように、いつか、そうハデスによって。別の時代に、別の神によって。それはまさに、お前の心のなかに、つねに男の心を狂わせるものがあることを証している。

ペルセフォネー　やめてください。ああ、お母さま、どこにいるのですか。お願いだから、この汚れた手から、私を守ってください。

ゼウス　馬鹿め、そうやって母親に頼るかぎり、お前の心のなかの、こうした悲劇を呼び込む本質はなくならないと言っているのだ。

〔ゼウス、ペルセフォネーの服をむしり取る 〕

ゼウス　お前の心は、つねに母親と一体であることを望む。だが現実には、お前とデメテルは別個の存在。つねに一緒にいられる訳ではないのだ。そうだ、今のように、ときには離れ離れになることもあるのだ。

ペルセフォネー　お母さま！　　お母さま！

翌日、同じ神殿にて

　はじめペルセフォネーが一人でいるが、そこにデメテルが現れる。デメテルは帰宅してきた形である。血で汚れた服を着ているペルセフォネーは、その腕に新生児を抱いている。

ペルセフォネー（ 独白 ）どうして私が子供を抱いているのでしょう。子供であるはずの私が、どうして、このような子供を。もしや私は母親になったのでしょうか。そんな馬鹿なことがあるでしょうか。私が母親だとしたら、どうして娘として母さんに寄り添うことが出来るでしょう。ああ、そうよ、私はいつまでも母さんの子供。デメテルの娘ペルセフォネー。処女で子供らしいペルセフォネー。

〔腕のなかの新生児に目を向けながら〕

ペルセフォネー　この子供を手放しさえすれば、そうだわ、私はまた子供に戻れるんだわ。出産で苦しんだときに刻まれた皺も、疲れた皮膚の感じも、艶やかさを失った髪も、この子を手放しさえすれば、その全てが元に戻るはず。

〔デメテル登場〕

デメテル　どうしたのです、ペルセフォネー。その胸に抱いている赤ん坊は何なのです。私がゼウスに命じられて地上を視察していた間に、娘よ、わが子よ、いったい何があったというのです。

ペルセフォネー　何もありません。何もあるはずがありません。この子供は、なぜかこの場所に落ちていたもの。私には何の関係もありません。ついつい抱き上げてしまっただけなのです。

デメテル　けれどお前の頬には、産みの苦しみが刻んだような皺があるわ。

ペルセフォネー　この子供を床に置けば、このとおり、そんな皺は消えてしまいます。

デメテル　それにお前の皮膚は、全体に疲れたような感じがしているわ。

ペルセフォネー　床に置いた子供に背を向ければ、そのような疲れは取れてしまいます。

デメテル　でもお前の髪は、若い娘に特有の艶やかさを失っているわ。

ペルセフォネー　こうして子供から遠ざかれば、私の髪は、また美しい金色に輝きます。

〔ペルセフォネー、美しい娘の姿に戻る。衣服についた血も消える〕

デメテル　ああ、これこそ私の娘の姿だわ。どこまでも美しい、まだ一切の穢れを知らない私の愛娘。可愛い可愛い私の娘。ペルセフォネー、さあ一緒に来なさい。向こうで私が、お前の髪を梳いてあげましょう。お前は私の可愛い人形なのだから。

ペルセフォネー　はい、お母さま。

姉と弟

　同じ神殿。かくして一人残された新生児のところに、女神アテナが訪れる。

アテナ　惨めなものだな。両親はともに神であり、自身こんなにも美しく輝いた子供であるのに。ザグレウス……ここにはいない、お前の父親が付けてくれた名前だよ。反吐が出るほど冷たい、お前の実の父親がつけた、な。ゼウスは、お前を堂々と息子とは呼べないらしい。なにぶん妻の嫉妬が恐ろしいらしくてな。ならば、他の女神などと交わらなければいいだろうに。

ザグレウス　あなたの目は、私への同情に満ちている。なぜですか。

アテナ　もう話せるとは、まるでヘルメスのように早熟だな。

ザグレウス　親に愛されなかった子供は、守ってくれる者がいない分、早くに知恵をつけるものですよ。そうでないと生きていけませんからね。

アテナ　そうだな。となると、私もまた親に愛されていなかったのかもしれない。なにしろ私は、生まれてきたその時点で、すでにすっかり成人していたのだからな。あまつさえ私は、母親から生まれてくることすら許されていなかった。私は父ゼウスの頭から生まれた子供だったのだ。

ザグレウス　それで私に同情してくれているのですね、姉君。

アテナ　そうかもしれない。

ザグレウス　では同情ついでに私を抱いて頂けますでしょうか。どれほど知恵を育てても、しょせん知恵だけでは世の中を渡っていけない、そういう悲しい現実もあるのです。それは私が赤ん坊であるということ。誰かに抱っこされなければ動くことも出来ないということです。

〔アテナ、ザグレウスを腕に抱く〕

アテナ　武芸には自信があるのだがな。残念ながら、それと同じぐらい巧みに赤ん坊を抱ける自信はない。下手くそで痛いかもしれんが、それでも我慢するというなら、こうしてお前を抱いてやる。

ザグレウス　もちろん我慢しますとも。

アテナ　それに、お前から求められずとも、実は私は、ハナからお前を抱いて運ぶことを命じられているのだ。私はそのためにここに来ている。お前の父親であるゼウスから命じられたのだ。

ザグレウス　運ぶとはどこに？　　まさかゼウスの許という訳でもないでしょう。

アテナ　言葉では軽く否定しているが、その顔からは、せめて父親には抱いてもらいたい望みが見て取れる。ふ、健気だな。だが、しょせんお前には、温かな家庭というやつは用意されていないのだよ。私たちのような庶子には、どんなによくても、正妻の目が届かない場所にしか、生活の場を用意してもらえないものなのさ。

ザグレウス　では、どこに？

アテナ　クレタ島のイダ山、その中腹にある洞窟だよ。

ザグレウス　洞窟ですか。暗い場所ですね。

アテナ　ああ、暗いな。

イダ山の洞窟

　洞窟を訪れるアテナとザグレウス、迎えるシレノス。

アテナ　用意は出来ているだろうな。

シレノス　もちろんです。生活しやすいよう整えてありますし、小物などにも気を遣っております。弟君のベッドは柔らかく、明り取りには、ヘパイストスが作った発明を使っております。（ ランプを指しながら ）それが煌々と照らしているので、まるで晴天の下にいるような明るい室内ですよ。

ザグレウス　けれどもここは洞窟の中。いくら明るくても暗い場所。

アテナ　父親の気持ちが形になったようなものだ。後ろめたい気持ちがあるから変に優しくなる。暗い場所に押し込めながら、なのにその場所を明るくしようとする。本来ならば、明るい場所で厳しく子供を育てるのが、父親たる者の真の務めであろうがな。

ザグレウス　でもいいんです。父は私を、あなたという方に巡り合わせてくれた。それだけでも大いに、あのゼウスに感謝したい気持ちになります。だって姉君、父からの使者があなた以外の方であったなら、私はこのようには心を開いていなかったでしょうから。

〔アテナ、束の間このザグレウスの言葉を噛みしめてから喋る〕

アテナ　シレノス、この弟を絶対に守れよ。何かあったら、すぐに私を呼ぶのだ。梟〔フクロウ〕を一羽置いてゆくから、これを伝達役に使うがいい。私には神としての任務があるから、大部分の時間をそちらに割かなくてはならぬ。だが、今やここは私にとって最も大切な場所、そしてこの子は、私にとって最も大切な存在だ。

シレノス　ザグレウスさまに何かあったら、この私をいかようにも。

アテナ　ならば弟よ、どうか健やかに。もちろん会いに来るつもりではいるが。

ザグレウス　どうか明日にでも。

三日後の同じ洞窟

　ザグレウスとシレノスのもとにアテナが訪れる

アテナ　大きくなったな。赤ん坊というよりは、もう子供だ。

ザグレウス　これぐらい、私にはもどかしいぐらいです。もっと成長したい。もっと大きくなりたい。そうして強くなりたいのです。

アテナ　なぜだ。

ザグレウス　なぜでしょう。こうして弱いままだと誰かに打倒されてしまう、そうした暗い予感があるからかもしれません。ただ少なくとも、強くなりさえすれば姉君、きっとあなたの助けになることも出来るでしょう。

シレノス　ええ、そうですとも。アテナさま、ザグレウスさまは、いつだってアテナさまのことを想っておられるのですよ。

アテナ　私のお前に対する愛情など、たかが知れたもの。なのにお前は、私に心からの愛情を返そうとしてくれている。ああ、お前のそうした健気さを見ていると涙が出てくるよ。お前は知らないのだな、母親の愛を。あの無条件に子供を愛する、深くて真実な母性の賜物を。私は呑み込まれたゼウスの腹のなかで、わずかに母の愛を知ることが出来た。が、お前はわずかだにも母の愛を知らないのだ。だからこんなに無骨な私でも愛してくれる。

ザグレウス　そんな風に言わないでください。比較など無意味です。だって、私を愛してくださったのは、あなただけなのですから。

アテナ　お前には、もっと愛される権利があるのだ。優しくて美しい弟よ。

シレノス　まことにそうです。

アテナ（ 彼方に ）父神よ、聞こえるか。私はお前に祈ろう。悔しくてたまらないが、オリュンポスで最も権威高き存在であるお前に。どうかこの哀れな弟に、本当の母親の愛情を教えてやってくれ。私のような無骨者ではなく、もっと柔和で女性らしい女によって。そうだ。そういう女性によって、この子が、その身を優しく包まれるような経験を得られるように取り計らってくれ。でないと私は、ザグレウスが不憫でならない。

ゼウス（ 彼方で ）神の祈りを無下にする訳にはいくまい。だが、本当の母親を所望するならば、ザグレウスはもう一度生まれ直さなければなるまい。赤ん坊として、再び子宮に宿らなくてはなるまい。何も知らない、何も覚えていない赤ん坊として、もう一度やりなおさねばなるまい。それでもよいのか。

アテナ　それで、この子に真の愛情が注がれるならば。

ゼウス　では、そのように取り計らおう。ただし覚えておけ。生まれ変わるとは、まず死ぬことに他ならない。

真夜中の来訪者たち

　真夜中、イダ山の洞窟にティターン神族三名が現れる。ピロテス（ 愛欲 ）モモス（ 非難 ）タナトス（ 死 ）である。彼らは地上をさまよう、ティタノマキアの敗残兵であった。

〔三名、洞窟の扉を見ながら〕

ピロテス　ここにいる。俺の愛欲をかき立てる美しい少年が。

モモス　ここにいる。俺の非難をかき立てる、あのゼウスの子供が。我々ティターン神族を打ちのめしたゼウスの子供が。そうだ、ここにいるのだ。

タナトス　ここにいる。俺の死の一撃を欲しがっている者が。

シレノス（ 侵入者たちの声に気づいて ）何者だ！　おお、なんという大きな体。この洞窟の天井に、頭が突き刺さってしまうのではないか。そうか、お前たちはティターン（ 巨神 ）の生き残りだな。だが、なぜこんなところに。

タナトス　さあな。同じものを、ときに偶然と呼び、ときに運命と呼ぶことがある。正直わしにも、ハッキリとは答えられんさ。ただ、そのどちらかであることは確実だ。

シレノス　梟よ、この状況をアテナさまに伝えよ。さあ、飛ぶのだ。

モモス　鳥など放って何のつもりだ。まあ、何をしようと構わないがな。なにしろ我らの用はすぐに済むのだから。ほうら見てみろジジイ、さっそく奴の方からわしらに近づいてきたではないか。

〔寝ていたザグレウスが起きてくる〕

ザグレウス　なんの騒ぎだ？

シレノス　ザグレウスさま、来てはなりません。

ピロテス（ ザグレウスを見て ）やはり美しい少年だ。そういう匂いがしたのだ。さあ、抱いてやるぞ。きつく、きつくな。体中の穴という穴に、凌辱の熱汁を注ぎ込んでやる。

ザグレウス　黙れティターンども。オリュンポスの神々との戦争に負けた敗残兵たちめが。父に負けた者たちが、息子には勝てるとでも思ったのか。

モモス　笑わせるな、お前のようなガキに勝てない訳があるか。俺はお前を、お前らの一族を、最後の一人まで非難する。そうして徹底的に苦しめてやるのだ。この恨みを晴らさずにおくものか。ティタノマキアで敗れた俺たちが、これまでどんな苦しみを味わってきたか分かるか。

ザグレウス　知ったことか。いいだろう、今から私の力を見せてやる。シレノス、どいていろ。

〔ザグレウス、獅子に変身する〕

シレノス　おお、ザグレウスさまの変身の力だ。猛々しい獅子の姿に変わったぞ。

モモス　関係あるか。叩きのめすだけだ。

ピロテス　待て、傷つけるな。何という美しい獅子だ。少しばかり俺に抱かせてくれ。

モモス　馬鹿が、愛欲の虜になりよって。奴を倒すのに邪魔だから、いいからそこをどけ。何をゼウスの息子の盾になってやがるんだ。

ザグレウス（ピロテスに）離れろ、うっとうしい。頬をすり寄せるな、気持ちが悪いぞ。くそ、この姿が悪いのか。また変身してやるぞ。

シレノス　今度は馬だ。俊敏そうな馬になったぞ。あ、何をする！

〔シレノス、タナトスに羽交い絞めにされる。ただし口は封じられていない〕

ピロテス　美しい馬だ。ますます好ましいぞ。さあ抱かせてくれ。

モモス　誰だ、こんな色ボケ野郎を連れてきたのは！

ザグレウス　これもだめなのか。ああ、気持ちが悪いなんてものじゃない。よだれがつくではないか。ならば、これではどうだ。

シレノス　おお、今度は醜いぞ。角を生やした蛇だ。禍々しい力に溢れている。

ピロテス　何を言うか。こんなにも美しい龍があるか。どうか、俺に巻きついてくれ。きつく抱きついてくれ。ああ、何という素晴らしい快楽なのだ。

ザグレウス　こいつ龍が好きなのか。くそ、だが、ならば虎は好かぬだろう。

〔ザグレウス、虎になる〕

ピロテス　素晴らしい。

モモス　これでは埒があかん。

ザグレウス　父は大戦争を巻き起こしたというのに、俺にはまともな勝負をすることも許されぬのか。くそ、ならこれは極めつけだぞ。猛牛に変身してやる。

〔ザグレウス、牛になる〕

ピロテス　あ、牛だ。

シレノス　どうかしたのか、色ボケの目つきが変わったぞ。

タナトス　ふ、牛は良かったな。運の尽きだ。

シレノス　どういうことだ。

タナトス　老人よ、お前がよほど空腹に苦しんでいたとして、そのとき目前に「裸の美女」と「美味そうな御馳走」が並べられたとしよう。お前ならどちらに手を伸ばす？

シレノス　それは……

タナトス　そうだ。食い物のほうを選ばざるを得ない。つまり極限状態にあっては、食欲は断じて性欲に勝るのだよ。そもそも我らは敗残兵。昨今ろくなものを食べていない。そこにきてあの美しい牛だ。いや、あれは私たちにとっては、美しい牛ではなく、旨そうなビーフでしかない。むろんピロテスにとってもな。

シレノス　ということは……

ピロテス　殺して食うまでだ！

モモス　それでいい。いままで絡みついていたのだから、そのまま絞め殺してしまえ。

ザグレウス　ああ、骨がきしむ。肉がちぎれそうだ。

モモス　俺が手伝いをしてやる。八つ裂きだ。

〔モモス、牛の手足を引きちぎろうとする〕

ザグレウス　痛い！　　痛い！

タナトス　俺のぶんも残しておけ。

〔タナトス、シレノスを放り投げて、牛を食べにいく〕

シレノス　やめろ、卑しいティターンども。

〔ティターンたち、容赦なく牛を食らう〕

ザグレウス　痛い！　　痛い！

タナトス　では楽にしてやろう。苦しみの後には、やはり死がつきものなのだ。

〔タナトス、牛の角を掴んで、その首を勢いよくひねる〕

シレノス　何ということを！　　ぐったりしてしまって、ああ、ザグレウスさまは亡くなってしまったのか。それにしてもアテナさまはどうしたのだ。弟君がこんなことになっているのに。梟はオリュンポスに着かなかったのか。

タナトス　老人よ、一人で何を喚いているのだ。すべては終わったというのに。ザグレウスは死んだ。ならばお前も食べないか、この極上の牛肉を。

シレノス　やめろ、そんなにも非情にむさぼりおって。

モモス　うるさいな。なんだ、かかってくるのなら構わんぞ。お前も殺してやる。いい肉を食って、ちょうど栄養が付きすぎたところだ。もうひと暴れするのに、何を躊躇おうか。さあ来い、殺されに来い。

〔そう言ったモモスの背後に人影が現れる〕

アテナ　来たぞ。

〔アテナ、モモスの首を、剣で分断する〕

ピロテス　何者だ。や、お前はアテナだな。ゼウスの娘の。お前も殺してやるぞ。

アテナ　よくもザグレウスを、我が弟を！　そのうえ私のことも殺すだと。お前たちのような一兵卒が、この武神であるアテナに勝てるとでも思っているのか。馬鹿めが、まとめてタルタロスに送ってやる！

〔アテナがわずかに動くと、ピロテスとタナトスが血を吹き出す〕

シレノス　瞬殺だ。もう片が付いてしまった。

〔ティターンたちの死体が蒸発する〕

アテナとシレノスだけが残った洞窟

　肩を落とすシレノスと、表情のないアテナ。

シレノス　ああ、けれどもアテナさま、あなたは遅すぎました。

アテナ　梟の到着が遅れたのだ。話を聞くと、どうやら道中で鷲に邪魔されたらしい。いや何にせよ言い訳だな。事実はひとつ。私が助けてやれなかったせいでザグレウスは……わが最愛の弟は死んだのだ。

シレノス　相手がティターンでは、私もどうすることも出来ませんでした。

アテナ　分かっておる。奴らの凶暴なことと言ったら、見ろ、遺骸さえ、ろくに残ってはおらぬ。ほとんどが食べられてしまった。残っているのは、破片となった牛の骨と、そして、ああ、ここに心臓が残っておる。

シレノス　アテナさま、ご覧ください。この心臓、動いておりますぞ。

アテナ　だが、その動きが弱まってきている。このままではまずい。シレノス、私はこの心臓を持ってオリュンポスに戻るぞ。ゼウスにならば、あるいはザグレウスをどうにかすることが出来るかもしれない。

オリュンポスの宮殿

　一段高い王座に座るゼウスと、それにかしずくアテナ。

アテナ　父よ、あなたの息子の心臓です。

ゼウス（ 心臓を受け取りながら ）分かっている。

アテナ　分かっている？

ゼウス　ああ、お前の祈りを叶えるために、私はどうしても、こうしない訳にはいかなかったのだ。

アテナ　私の祈りとは、ザグレウスに母親を与えることですか。

ゼウス　無論そうだ。本物の母親を得るためには、子はその母親から生まれなければならない。そして、生まれるためには、まず死ぬことが必要なのだよ。分かるだろう。ただし、神は不死の存在だからな。その神を殺すには、ああして同じ神の手を借りるしかなかった。

アテナ　けれども、ここまで残酷なことをしなければなりませんでしたか。

ゼウス　あれぐらい残酷でなければ、神を殺すことなど出来はすまい。しかし、ティターンどもより残酷なのはお前だぞ、アテナ。お前の祈りさえなかったら、ザグレウスもこのような目には遭わなかったのだからな。

アテナ（ 立ち上がって ）お前がザグレウスを本当に愛してやっていたなら！　……愛してやっていたなら、私だって、あのような祈りをしたものか。一段高いところから身勝手に子供を見下ろしおって。さらには自分の罪までも子供に押し付けようというのか。

ゼウス　どうとでも言うがいい。

アテナ　かくなる上は父よ、愚かな父よ、絶対にザグレウスを救え。ザグレウスに新しい命を与えるのだ。それが出来なかったら、私はお前に宣戦布告しても構わない。

ゼウス　ずいぶんとザグレウスに肩入れしたものだな。だが私は、跳ねっ返りよりも従順な娘のほうが好きなのだよ。アテナ、お前は私に反抗しすぎた。反抗して苦しみすぎた。だからその苦しみを、私が取り払ってやろう。

アテナ　何をするつもりだ。

ゼウス　眠れ。起きよ。

〔アテナ、ゼウスの言葉に合わせて目を閉じ、開ける〕

ゼウス　娘よ、ザグレウスとは何者であるか知っておるか？

アテナ　は、誰のことでしょう。

ゼウス　誰でもないし何でもない。お前は本当に従順で可愛い娘だ。さあ、下がって構わないぞ。

アテナ　ええ、それにしても父上、その手の上に乗っている心臓は何なのでしょう。

ゼウス　ああ、ちょっとした祈りを叶えるために必要なものさ。私はこれを飲み込んで、しばらく体内で活気づけてやらなければならない。

アテナ　いったい誰の何の祈りなのです？　父上にそのような面倒をかけるとは。

ゼウス　馬鹿な女の、くだらない祈りだよ。お前が気にするようなことではない。

〔アテナ退場〕

第２章　セメレー

登場人物

ゼウス　オリュンポス神族の最高位であり、雷神でもある。本章では、人間の姿に変身している時と、神本来の姿をしている時がある。

セメレー　テーバイ国の王女。王カドモスの娘。

ベロエ　セメレーの乳母。

ヘラ　神本来の姿をしている時と、ベロエの姿に変身している時がある。

☆ **カドモス**　テーバイ王

夜の逢瀬

　テーバイ国にあるカドモス王城の一室。人間の姿をしたゼウスと、王女セメレーが、ベッド上で抱き合っている。

ゼウス　気づいているか、セメレー。自分が妊娠していることを。

セメレー　ええ、もちろんです。だって、幸せな気持ちが、子宮からこみ上げてくるのですもの。そろそろお腹も大きくなってくるでしょう。ですから、あなたに抱かれるのも今日が最後ということでいいかしら。

ゼウス　最後だって？　　それはもう来るなということか。

セメレー　やだ違うわ。違います違います。もちろん会いに来てくれるのは嬉しいわ。いえ会いに来てくれなくては嫌よ。ただ、こうして子宮を揺らすようなことは、出産するまでの間はお休みにしてほしいの。だって、元気な赤ちゃんを産むためには、今からお腹のなかの環境を整えておく必要があるでしょう。あなたは静かに整えようとしている環境を、ちょっと揺らしすぎるわ。

ゼウス　それがお前の意志ならば従おう。夜風となって初めてこの部屋に入った日、お前の褥（ ベッド ）に入る条件として、私は約束したのだからな。セメレー、お前が望むことは全て叶えてやると。

セメレー　それではお願いよ、今夜が最後ということで。でも本当に、ねえ、会いに来てくれなくては嫌よ。

ゼウス　それは約束するが、しかし多少揺らしたところで、腹のなかの赤ん坊には何の影響も与えないと思うぞ。なにしろ、その赤ん坊は神の子なのだからな。それほどヤワには出来ていない。

セメレー　神の子……そうね、あなたの子供ですものね。でも、そうだとしても心配になるのが母親なのよ。この子のために出来ることなら何でもしてあげたい。たとえ小鳥の羽一枚の重みしかない些事であっても、それがこの子のためになることなら、進んでそれをしてあげたくなるの。親バカ？　だって愛おしいんですもの、この子が。あなたと私に授けられたこの新しい命が。

ゼウス　そんなにも子供を大事に想ってくれるお前ならば、きっとこの子の母親として、しっかりとその役割を果たしてくれることだろう。そして、それによって私も、あのアテナの祈りに対する責任を果たすことが出来よう。セメレー、どうかディオニュソスに対して、心からの愛情を注いでやってくれ。

セメレー　ディオニュソス、それがこの赤ちゃんの名前なの？

ゼウス　そうだ、二度生まれた者という意味の名前なのだよ。

オリュンポス神殿

　座って手芸をしているヘラの後ろを、ゼウスが通り過ぎようとしている。彼はセメレーのところから帰宅したところである。

ヘラ　近頃よく姿が見えなくなるのですね。

ゼウス　私も忙しいからな。

ヘラ　仕事に行って女の匂いを貰ってくるなら苦労はありませんわね。しかも嫌なことにはね、あなたからは女神ではなく、人間の匂いがするのですよ。まったく不思議なことに。そう、まったく不思議なことに。だって、あなたは数多の女神たちを差し置いて、わざわざ人間の女を求めるのでしょう。それはきっと、神よりも人間のほうに高い価値があるからですよね。そんな馬鹿な話、あるはずもないのに。

ゼウス　そうだ、そんな事はあるはずもないぞ。だから、わしが浮気しているなんて事もないのだ。分かってるじゃないか。

ヘラ　お黙りなさい！　なんて下らない軽口！

ゼウス　……きついな。

ヘラ　私はね、あなたが女神と浮気する時には、べつに憎しみは湧いてこないのですよ。たとえばペルセフォネーの時だってそうでした。裏切られて寂しいけれどそれだけ。憎

しみは湧いてこない。同じ女神ですからね、私とほとんど同等の存在に夫の目が向けられたとしても、それはある意味で仕方ないことだと思えるんです。

ゼウス　ほう。

ヘラ　でも相手が人間である時には、話はまったく別。私は、その場合には、たいそう自尊心が傷つけられるのです。だって、私よりもずっと下等な存在に夫の目が向くのですもの。とすれば、夫から目を背けられた私は……（ 急に激しく ）下等のさらに下等に位置づけられてしまうじゃありませんか。最高位の女神であるはずの私が、キーッ！
こんな腹立たしい矛盾、他には絶対にありませんでしょう！

ゼウス　……

ヘラ　そして、その腹立ちが、自分でも恐ろしくなるほどの憎しみを呼ぶのです。胸中で汚いヘドロが渦巻くような憎しみを。（ 少し落ち着いて ）といって、全能にして最高の神であるあなたを傷つけることは出来ない。それだからこそ、代わりに、あの哀れな人間たちを傷つけたくなるんだわ。そして、今はあの女を。

ゼウス　あの女とは？

ヘラ　さあ誰でしょうね。でも、そのうちに身をもって知るでしょうよ。あなたが何人の人間を相手にして浮気しているのかは知りません。けれど、今のところ私の目についているのは一人だけ。その女が、これからどんな目に遭うか、せいぜい不安がって心配してあげるといいわ。

カドモスの王城、セメレーの部屋

　セメレーと乳母のベロエが話している。

セメレー　ねえベロエ、どうか私に、妊娠中の心得を教えてちょうだい。

ベロエ　妊娠ですって？

セメレー　そうよ。昨夜あの方から確言してもらったの。私が妊娠してるって。私もそうだとは思っていたのだけれど、つわりがなかったから確信は持てなくて。でも、もう間違いない。心なしかお腹も膨らんできた気がするし。だから食事や運動について、乳母であるお前から、色んな話を聞いておきたいの。たしか三人も生んだことがあるのよね。だからお前は、母親として私の「人生の先輩」なのよ。

ベロエ　この妊娠のことは、もう父王にも伝えられたのですか。

セメレー　いいえ、まだよ。だって相手がゼウスだなんて、よほど確かな証拠を一緒に差し出して言わなければ、とても信じてもらえないもの。

ベロエ　あのですね、お嬢さまには申し訳ないのですが、正直に言って、私もずっと懐疑的だったのですよ。夜ごとの御相手が神さまだという話については。これまで何度かご相談を受けましたが、真剣に答えつつも、内心その「そもそものところ」を信じられませんでした。

セメレー　うそ、ベロエも信じていなかったの。お前、疑うような事は、なにひとつ言っていなかったのに。

ベロエ　喜んでいるお嬢さまを興ざめさせるような言葉は言えなかったのですよ。ですが、これからお腹がどんどん大きくなってくるという今に至っては、もう信じるも信じないもありません。お嬢さまの乳母として、全面的にそのお言葉を信じ切る覚悟を決めました。神さまの御子は、ものすごく成長が早いと言いますしね。

セメレー　ええ。

ベロエ　で、お嬢さまも分かっておられるようですが、父王さまの認知を得るために、いま最も必要とされているのは「証拠」です。つまり「お嬢さまの御相手が神さまである」ということの証拠ですね。それが無ければ、お腹の子供はおろか、お嬢さま自身だって、絶対に不幸になるしかありません。今のままでは、怒り狂った父王さまによって、このお城を追い出されるしかないでしょう。

セメレー　でも証拠と言ったって、具体的に、何をどう示せばいいのか。

ベロエ　それでしたらお嬢さま、とても簡単な話ですよ。あなたはゼウスさまに頼めばいいんです。「どうか、あなた本来のお姿で、私のもとに来てください」って。

セメレー　本来の姿？

ベロエ　ええ。というのはですね、神さまたちは、人間には到底ありえない姿でもって、天界で過ごしておられるのです。実に神々しい姿でもってです。その姿でここに降りてきてもらえれば、それを見た父王は、否が応でも、お嬢さまの御相手が神さまであることを、認めざるを得なくなります。

セメレー　ああ、なるほど。

ベロエ　逆に、それをしない限りは、たとえ父王さまに「お前の相手は不浄の者なのではないか」と詰め寄られたとしても、それに対して、文句一つ言い返すことも出来ません。

セメレー　そうかもしれない。けれどベロエ、お前はどうして天界での神さまの姿なんて知ってるの？　　お前がそんなこと分かるはずないでしょう。だってお前は、私の乳母でしかないのだから。

ベロエ　そうではありません。私は天界のことをよく知っています。なにしろゼウスは、いつも本来の姿でもって、私の褥に入ってくるのだから。私はゼウスの本当の姿を知っている。荘厳な雷を身にまとい、すばらしく美しい胸板を露わにしながらベッドに近づいてくる、その時のゆったりとした仕種まで知っている。

〔光りながらベロエが変身し、次第にヘラの姿になっていく〕

セメレー　ああ、どうしたのでしょう。こんなにもベロエが輝いているなんて。

ヘラ　この程度の光輝でも眩しいのね。せいぜい御覧なさい、このヘラ女神の姿を。

セメレー　ヘラさま、あなたはヘラさまなのですか。

ヘラ　そうよ。今日は、お前に伝えるべき事があってここに来たの。それは、お前が孕んでいるのがゼウスの子供ならば、それは同時に、ゼウスの妻である私の子供でもあるということ。つまりお前の子供は、私にとっても大切な大切な「我が子」であるということね。

セメレー　ああ、眩しいわ。

ヘラ　だから王女であるお前が、つまらない男と姦通した濡れ衣なんか着せられたら――そのせいで王城を追放などさせられたら、私だって困るのよ。その時には、お前と一緒に、私の大切な子供までが露頭に迷うわけですからね。だから私は、そうならないための知恵を授けてやりに来たの。他でもない、父王に差し出す「相手が神である証拠」を手に入れるための手段をね。そして、その方法は先に言ったとおり。ゼウスに向かって「あなた本来の姿で私のもとに来てください」って言えばいいのよ。

セメレー　ヘラさま、ああ、ヘラさま、私は誤解していました。巷間で噂されているとおり、私、あなたを嫉妬ぶかい女神さまだと思っていたんです。でも、本当のあなたは、妾やその子供にまで慈しみを垂れる心優しい神さまでした。なんだか心が洗われるようです。ありがとうございます、こんなにも私たちを大事に思ってくださって。

ヘラ　そうよ、私はお前とその子供が本当に大切なの。だから素直に私の言うことを聞きなさい。

セメレー　もちろんです。ヘラさま、もちろんです。

最後の逢瀬

　その夜の同じ部屋。ゼウスとセメレー。

ゼウス　なに？　　私の本来の姿が見たいだと。

セメレー　そうです。是非お見せ願いたいんです。好奇心ではなく、私と子供のためです。そう、私たちのために、是非ともそのお姿を、私と父上のまえで現わしてほしいんです。だって、それをして頂かなければ、私の夫が神さまなのか人間なのか、結局父には分かりませんもの。

ゼウス　それは、どうしても叶えなければならないのか。

セメレー　当然です。だって、あなたは私たち親子を愛しているのでしょう。ならば家族の将来のためには、何としてもこの事をしてくれなくてはなりません。お腹の子のためにも、私は、変な濡れ衣をかぶって、路頭に迷うわけにはいかないんです。それに……それに私たち二人の間には、あの褥の契約があるはずです。

ゼウス　あの、すべての願いを叶えるという契約か。

セメレー　そうです。あなたには、私の願いを叶える義務があるんです。まさか神さまが、約束を破ったりはしないですよね。

ゼウス　だが、私の本来の姿というのは。

セメレー　私、想像してウットリしてしまったんです。荘厳な雷を身にまとい、すばらしく美しい胸板を露わにしながら、ゆったりと私に近づいてくるあなた。そんなあなたの姿を、一目でいいから見てみたい。

ゼウス　セメレー、お前、どうして私のそのような姿を知っているのだ。

セメレー　ヘラさまに教えて頂いたんです。ああ、ヘラさまって何ていい方なんでしょうね。あの揺るぎない慈愛の深さ。まさに、女神さまたちの頂点に立つに相応しい方ですわ。

ゼウス　ヘラがお前に……そうか。では、もう後戻りは出来ないということだな。（小さく）ここで下手なことをすれば、私とヘラの関係は大きく捻じ曲がってしまう。それはオリュンポス神族の中心点のブレであり、いわば私の治世の終わりの始まり。となれば、いまやセメレーの命は、私の体面と、神々の秩序を保つための人身御供なのだ。

セメレー　何をブツブツ仰ってるの？　　あなたは本来の姿で、私のもとにやって来てくださるの？

ゼウス　ああ、そうしよう。明日、かならずお前の望みを叶えてやる。ただし、まずはお前ひとりに、私の本来の姿を見せてやろう。父王に対しては、そのあとでも構うまい。そうしなければ、被害が拡大するのを抑えられないからな。

セメレー　また何か、小さな声で言いましたか。

ゼウス　いや、何でもない。

オリュンポス神殿

　身支度を整えているゼウスに、ヘラが話しかける。

ヘラ　雷を身にまとって、あら、どこかへお出かけですか。

ゼウス　まあ、いい気味だと思っているのだろうな。

ヘラ　そうよ。だって、あなたが悪いんですもの。

ゼウス　そういうところだ！　お前のそういうところが、私をときに他の女神に、あるいは従順な人間の女に向かわせるのだ。

ヘラ　何がよ。

ゼウス　分からないか？　つまり女のそういう気の強さ、我の強さは、男の気持ちを萎縮させ、怖気を催させ、ひどいときには性欲さえも押さえつけてしまうということだ。

ヘラ　何を言っているのよ。浮気好きの男が偉そうに。私はあなたの正妻なんですから、なんて言い返してこようと、私のほうが正当性を持っていることは動かないんですからね。

ゼウス　ああ、お前は正しいさ。だが、その正しさが、私の関心をお前から逸らせることになる。だからお前は、正しいとはいえ、明らかに愚かなのだ。

ヘラ　なんですって？

ゼウス　たとえ正しさを犠牲にしても、お前は、私のまえでは従順でか弱い女を演じるがいい。男のワガママを大人しく受け入れるがいい。そうすれば私は、いつでもお前のベッドに誘われていくだろうさ。その弱い、ゆえに魅力的な、可愛い女のもとにな。ペルセフォネーの時のように。セメレーの時のようにな。

ヘラ　何を言っても無駄よ。それとも何、私と別れるの？　　もし別れたなら、あなたの最高神としての威厳も、オリュンポス神族の秩序も、一気にガタガタになるでしょうね。それでもいいのかしら？

ゼウス　……すまぬ。私はお前とは別れられない。

ヘラ　なら行って始末をつけてらっしゃい。雷の神として、セメレーのもとに。

夜、カドモスの王城

　城の裏手にある林。そこにセメレーが立ち、少し離れたところでベロエ（ 本物 ）が心配そうにセメレーを見守っている。二人は、本来の姿でやって来るというゼウスを待っているところである。

セメレー　もうそろそろだわ。あの方がいつもお出でになる頃合いは。

ベロエ　そうなんですか。そういえば、天の星が、一つだけ妙に大きくなりました。

〔瞬間、あたりが真っ白になって何も分からなくなる。だが次の瞬間にはセメレーの体が燃え上がっており、その体をゼウスが支えている〕

ベロエ　ああ、なんてことに。雷がお嬢さまのもとに落ちるなんて。

ゼウス（ 輝きながら、セメレーへ ）これがお前の求めたものなのだよ。しょせん人間には、私の本来の姿を受け止めることは出来ないのだ。

セメレー　私は死ぬのですか。

ゼウス　そうだよ、私が愛したセメレー。

セメレー　では、せめて子供を、私の子供を助けてください。どうか今、私のお腹を開いて、子供だけ助け出してやってください。いえ、その前に、一目だけでも私に子供を見せてください。

ゼウス　ならばそうしよう。（ セメレーが望んだ通りのことをしてから ）これがお前の子供だよ。ディオニュソスだよ。

セメレー　ああ、かわいい子。私がお前のお母さんよ。手も燃えてしまって、もう抱きしめることは出来ないけれど……もう一緒にいることも出来ないけれど、でもお母さんは、誰よりもお前を愛しているわ。

ゼウス　もう話すな。楽にしてやる。目をつぶれば、その時には、お前はすでに冥界に移り住んでいるだろう。さよなら。

〔セメレー、まばたきするのを惜しむようにディオニュソスを見つめる。しかし限界を感じてその目を閉じながら〕

セメレー　さようなら。

〔ゼウス、左腕にセメレーの遺体を、右腕にディオニュソスを抱きながら〕

ゼウス　アテナ……彼女はディオニュソスを、ザグレウスをその手に抱くことも出来なかったが、それでも母親としての真の愛情を、確かにこの子に注いだぞ。だから、どうかこれによって、お前の祈りを叶えたことにしては貰えんだろうか。まあ、今のお前は、そのような祈りを発したこと自体を覚えてはおらぬのだろうが。

〔セメレーの遺骸は消失。ゼウスはディオニュソスだけを抱く〕

ゼウス　おお、我が子よ。まだ泣くことも出来ぬのだな。なにしろ胎児である上に、人間で言えば、まだ六か月ほどの月齢に過ぎないからな。人の形はしているが、あまりにも小さい。とはいうものの、また心臓だけの時のように呑み込むわけにもいくまい。それでは、せっかくの体が、ふたたび溶けてしまうからな。ならば、お前はここに入っているがいい。私の太ももに穴を開けてやるから、ここに。

〔ゼウス、ディオニュソスを自分の太ももに入れる〕

ゼウス　こうすれば安心だろうし、ヘラに見つかることもない。だから、まだ眠っているがいい。日が満ちたら、お前を息子として外に出してやるさ。

第３章　子鹿と葡萄酒

登場人物

メロペー　ニンフ。ニンフは山川草木の精霊。

ステロペー　メロペーの仲間のニンフ。というより、二人はコンビである。

小鹿　ゼウスによって変身させられたディオニュソス。

☆ **ヘルメス**　使者の神

ニュサ、ニンフたちの村

　近くにいくつかの山が見える田園風景。二人のニンフ、メロペーとステロペーが、一匹の小鹿を挟んで会話をしている。

メロペー　この小鹿を預かってから、今日でちょうど五年が経ったんだね。

ステロペー　うん、とうとう。ちょうど五年前の今日にヘルメスが来たんだ。なんだか懐かしいね。あいつ「この小鹿を育ててくれ」なんて軽く言いやがってさ。

メロペー　そうそう。でも動物の世話って軽くないよね。

ステロペー　だから最初は、厄介なお荷物を渡されたって感じだった。だけど、なにぶん可愛かったからね。すぐに情が移っちゃって、今じゃ絶対にこの子を手放せないぐらいの気持ちになってる。だって、草の代わりに蜂蜜を餌にやってたぐらいだもの。そりゃ可愛いさ。

メロペー　でも、あのときヘルメスが言ってたよね。五年したら小鹿はいなくなるって。それって、この子を連れていかれるって事なんだよね、たぶん。

ステロペー　まあ、この子が特別な鹿だってことは分かってるんだ。なにせ五年のあいだ、ずっと仔供のままだったんだから。普通だったら、とっくに成獣になってるはずだもんね。そして特別なものは上位神の持ち物になるって相場が決まってる。

メロペー　でも、あたしたちだって神格を持ってるじゃない。

ステロペー　その格が違うんだよ。あたしたちはゴマンといるニンフ。ところが相手はオリュンポスの十二神ときてる。だからヘルメスは、いざとなったら無理やりにでも、この子を連れて行っちまうだろうさ。

メロペー　そんな事させないもん。ヘルメスが来たら、この子のフンを投げつけちゃう。……そんなんで追い返せるかは分からないけど。

ステロペー　なんにせよ五年は経っちまったんだ。抵抗する覚悟でも、諦める覚悟でも何でもいい。とにかく覚悟だけはしておきなよ。

メロペー　んー。

〔拳を握ってしかめっ面をするメロペーの横で、彼女を見上げながら小鹿が喋る〕

小鹿　大丈夫。僕は二人のそばを離れたりしないよ。

メロペー　子鹿が話したよ、ステロペー。どうなってるの。

〔子鹿、しだいにディオニュソスへと変身してゆく〕

ステロペー　それより姿が変わってきてる。もう子鹿じゃなくて少年だ。少年で、うわーキレイな少年だな。鹿の時よりもずっと可愛いや。

メロペー　もしかして、これが五年後に子鹿がいなくなるって事なんじゃないかな。だっ

て実際に、子鹿はもういないもの。

ディオニュソス　今まで育ててくれてありがとう。メロペー、ステロペー。二人とも大好きだよ。

メロペー　えー、なんか恥ずかしいよ。もう、そんなキレイな顔でこっち見ないで。なんか惨めになっちゃうよね、ステロペー。化粧っ気がない上に、こんな汚れた服を着てることがさ。

ステロペー　おいおい、いきなりメロメロかよ。でも確かに照れるな。えー、子鹿くんは何ていう名前なの？　てゆうか名前なんかあるの？

ディオニュソス　もちろん小鹿くんでもいいんだけど、一応ディオニュソスっていう名前があるんだ。それから二人ともキレイだよ、姿も服もね。

ステロペー　そんなまさか。

ディオニュソス　だって僕なんか裸なんだもの。ハハ、今の今まで動物の生活を送っていただけにさ。そして、服を着てる人たちの間にいて裸姿っていうのは、かなりみっともないことだよね。

ステロペー　あ、ごめん、服が欲しいんだね。でも衣服なんて、本当にコキタナイのしかないんだよ。

メロペー　あたしの服のほうが、まだしもキレイよ。

ディオニュソス　ありがとうメロペー。でもステロペーのコキタナイのでいい。

ステロペー　……

ディオニュソス　あ、ごめんなさい、失礼なこと言って。でも、本当に少しぐらい汚いほうがいいんだ。そのほうが、もしかしたらヘラの目を晦ませられるかもしれないから。

ステロペー　ヘラの目を晦ます？　　どういうことだい。

談話

　服を着たディオニュソスを挟む形で、野に座る三人。さっきまでより、少し落ち着いた雰囲気。

ディオニュソス　あのね、僕はゼウスの子供なんだ。

ステロペー　げ！

メロペー　すごい神格ってこと？

ディオニュソス　でも母親は人間。すごく優しい人だった気がするけど、でも人間は人間で、しかも父さんの浮気相手。とくれば、僕のお母さんに対して、ヘラが何をしたかは、だいたい想像がつくでしょう。

ステロペー　つくね。まず、その女は殺しちまうだろうし、女の子供に対しても、やっぱり、嫌がらせとか、すごくすると思う。

ディオニュソス　そうなんだ。だから父さんは、僕の姿を変えたうえで、このニュサのニンフ村まで送り届けた。ヘルメス神に命じてね。さっき二人は、この時のことを話してたんだよね。

メロペー　じゃあ、鹿のときも、あたしたちの話は全部分かってたんだね。

ディオニュソス　もちろん。話も分かってたし、その話で、けっこう教育してもらったと思う。二人が眠ってる間にヘルメスが来て、彼からも色んなことを教えて貰いはしたんだけど。

メロペー　あいつ来てたんだ。知らなかった。

ステロペー　でもさ、ヘラに見つからないようにって、子鹿に姿を変えてたんだろう。それが神の姿に戻っちゃったんじゃ、一気に危険の度合いが高まってくるんじゃないのかい。

ディオニュソス　そうだね。こうしてステロペーの服を貸してもらっていても、実際には何の効果もないのかもしれない。

メロペー　じゃあ、もっと汚い服のほうがいい？　　いっぱいあるわよ。みんなステロペーのだけど。

ステロペー　ガーッ！

〔三人で笑いあう〕

ディオニュソス　ほんと二人と一緒にいると楽しいよ。でもね、この楽しい今だって、もしかしたらヘラの目が、じっと僕に狙いを定めてるのかもしれない。最高位の女神にとっては、それぐらいのこと訳ないのかもしれない。

ステロペー　だったら、なおさら子鹿の姿でいた方がいいじゃないか。

ディオニュソス　でも、そういう訳にはいかないんだ。神の子には、やはり神の子としての役割がある。それを果たすためには、ずっと子鹿の姿でいることは、あまりにも不利だからね。

ステロペー　不利って言ったって、ヘラに見つかって襲われたら、それこそ一巻の終わりじゃないか。ディオニュソス、お前、殺されるかもしれないんだぞ。

メロペー　いやよ、そんなの！

ディオニュソス　その時はその時だよ。自分の使命に忠実になることを誓ったなら、男はそのとき、自分の命への配慮は捨てなくちゃならない。それに僕は、ただ安全を図るためだけに、この五年を過ごしてきたんじゃないんだ。僕はもう、自分の使命を果たし始めている。

ステロペー　というと？

ディオニュソス　二人とも僕に付いて来てくれるかな。いいものを見せてあげる。

ブドウ畑

　村から少し離れた山の裏側。その斜面に、たくさんの葡萄がなっている。

メロペー　すごい。こんなところに葡萄の木がいっぱい生えてたなんて。

ディオニュソス　鹿だった僕が、後ろ足で土を耕して、そのうえで種を蒔いたんだ。ここまで増やすのに、まるまる五年かかったんだよ。そして、この液体を作るのにも、だいぶ時間がかかった。

〔紫色の液体が入った壺が、数個並んでいる〕

ステロペー　家の壺がやけに無くなると思ってたら、ディオニュソス、お前の仕業だったのかい。手癖の悪い子鹿ちゃんだね。でも何だい、この壺の中身。すごくいい匂いがするじゃないか。

ディオニュソス　どうか飲んでみてよ。メロペーも。

メロペー　わ、おいしい！

ステロペー　たしかに美味い。うまいけど……これは毒なのかい？　　胸が急に熱くなった。アチチチチ、それに頬が上気してきた。

メロペー　あたしなんか、足がフラフラしてきたよ。こおら、ディーオニューソス、キミ私たちをどうするつもりー。お姉さんをフラフラにして、おかしなことをするなんて、十年早いわよお。

ステロペー　おいおい、メロペー品がないぞ。だけどディオニュソス、本当にこれは何なんだ。毒を飲ませて、あたしたちを殺そうってのか。まあ、やたらと気持ちはいいけれども。

ディオニュソス　僕が二人を殺すわけがないでしょう。大好きな二人なのに。

メロペー　やーん。

ディオニュソス　この液体は、なんて言えばいいのかなあ。とりあえずヘルメスの話によると、神さまたちが天界で飲んでる神酒〔ネクタル〕っていうものに似てるらしいんだ。だから、そこから神って語を抜いて「酒」とでも呼ぼうかな。ここは神々の世界じゃないから、そのへんが妥当だと思うんだよ。

ステロペー　酒、酒ね。で、どうするんだい、こんなものを作って。

メロペー　飲むのに決ってるのらー！　　ういっく。

ディオニュソス　まあ、そうだけどね。でも、それより何より、この酒がないことには、僕の使命は決して果たせないんだ。僕の使命は、まずこの酒を広めることから始まる。

〔メロペー、泥酔して眠る。ステロペーも立っていられない〕

ステロペー　なんだいメロペー、お前眠っちまったのかい。だらしないね。で、ディオニュソス、こんなものを広めて、何をやらかすつもりなんだい。

ディオニュソス　祭だよ。この酒を飲みながら、みんなで祭を楽しむんだ。その祭の祭司になることが僕の使命、役割なんだ。

ステロペー　何のための祭なんだよ。ひっく、それは。

ディオニュソス　まだ分からない。これから、それを探しに行かなくちゃならないんだ。

ステロペー　探す？　　どこを。

ディオニュソス　どこだろう。行先は分からないけど、でも危険な旅になることは確かだと思う。未知の世界に踏み出すんだし、しかも、どこに行ったって、あのヘラの悪意が僕を待ち構えてるんだし。

ステロペー　そいつは危険すぎる。

ディオニュソス　だから僕は、もう二人から離れなくちゃならない。大切な二人を危険に晒すわけにはいかないもの。僕は一人で旅立つよ。

ステロペー　ちょっと、どういうこと。

〔ステロペー、立ち上がろうとするも、酔いのため、すぐにしゃがみ込んでしまう〕

ディオニュソス　動けないでしょう。それでいいんだ。追いかけられたら、僕、行くのを躊躇ってしまうもの。ステロペー、僕いくね。メロペーにもよろしく。二人とも本当に大好きだった。じゃあ、ね。

〔ディオニュソス、旅立つ〕

ステロペー　ああ、子鹿が……五年後に消える。

〔ステロペー、眠る〕

第４章　イノーとアタマース

登場人物

ヘルメス　使者の神。ゼウスとディオニュソスをつなぐパイプ役と言えるが、むしろ自分の意志でもって、ディオニュソスを支えている。オリュンポス十二神の一柱であり、古代より偉大な神とされている。

ディオニュソス　主人公。酒の神。ここでは七歳ぐらいの少年の姿。実年齢は五歳。

イノー　ディオニュソスの母がセメレー。そのセメレーの姉がイノー。したがって、ディオニュソスにとってイノーは、伯母さんということになる。現在イノーは、オルコメノス王国の王妃として暮らしている。

アタマース　イノーの夫。ゆえにオルコメノス王国の王。

レアルコス　イノーとアタマースの子。長男で七歳。

メリケルテース　レアルコスの弟。五歳。

使用人　オルコメノス王宮で雑用を任されている。年のころは五十歳というところ。

徒弟　使用人の召使。十代の少年。

ヘラ　ゼウスの妃。夫の浮気を許さないので、その浮気相手も、浮気相手との間にできた子供も許さない。死ぬまで追い詰める。

荒野

　ニュサのニンフ村から遠ざかる道すがら。荒れた土地。そこを四つん這いになって歩くディオニュソスの姿がある。彼の背には、小さな酒壺が引っかかっている。そんなディオニュソスのもとに、空からヘルメス神が訪れる。

ヘルメス（笑いながら）失敬、ディオニュソス。気を悪くしないでくれたまえ。ついだよ、つい笑いが出てしまったのだ。だって君、姿はもとに戻ったのに、その歩きかたは子鹿のときのまんまじゃないか。

ディオニュソス　ヘルメス……まあ笑われても仕方ないでしょうね。けれども、五年も鹿の姿で暮らしていれば、どうしたってこの方が楽になってしまいます。さっきも池があったので、つい直接口をつけて水を飲んでしまいました。手や器を使うなんてことは、その時にはまったく考えもしなかった。

ヘルメス　まさに動物だね。

ディオニュソス　致し方ありません。

ヘルメス　とはいえ、偉大な神になろうとしている者が、そんな生活に慣れたままでは良くないだろう。第一みっともないからね。だが、そうすると……これはまさしく、渡りに船の話になるのかもしれないな、あの申し出が。

ディオニュソス　申し出？

ヘルメス　ああ、君を動物から人間へ矯正するには、まさに打ってつけの話だよ。ま、君は人間以上の者だがね。

ディオニュソス　それはどういう？

ヘルメス　つまりね、君の母親であるセメレーには、イノーというお姉さんがいるんだが、そのイノーが君に会いたがってるんだ。いや、会いたがってるだけでなく、君と一緒に暮らしたいと言ってる。そしてディオニュソス、人間らしくなるには、人間と暮らすのが一番手っとり早いとは思わないか。

ディオニュソス　要するに、伯母さんと一緒に暮らせっていうことですね。

ヘルメス　そうだ。けど、なんだか気乗りしない様子だね。

ディオニュソス　そんな事はありませんが……けれどもヘルメス、ほら、僕には使命と危険とがあるでしょう。葡萄酒を広める使命を放り出す訳にはいかないし、母さんのお姉さんでは、ヘラがその身辺に目を付けていない訳がない。とすれば、僕が伯母さんのところで暮らす訳にはいかないという事になります。

ヘルメス　それは理路整然とありがとう。

ディオニュソス　いえ。

ヘルメス　でもね、別にずっと伯母さんと暮らせと言ってる訳ではないんだよ。その獣臭さが抜ける程度の期間でいい。それにイノーは、いまテーバイ王国には住んでないんだ。九年前、テーバイからけっこう離れた、オルコメノスという国の王室に嫁いだのでね。そして、そこだったらヘラの関心の範疇にも入ってこないと思う。

ディオニュソス　つまりテーバイではないところで、少しの間だけということですか。そういうことならば、ええ。

ヘルメス　よしということで。

ディオニュソス　はい。

ヘルメス　では、私の肩に掴まりたまえ。この空を駆ける靴でならば、オルコメノスまで、ひとっ飛びで飛んでいけるから。

オルコメノスの王宮

　王宮自体は静かだが、そこで使用人の声が響いている。この使用人は自分の召使である少年を探しているらしい。他方、この場面の舞台は王と王妃の寝室である。そこに訪れたヘルメスとディオニュソス。彼らを迎えるイノーとアタマース。繰り返すが、アタマースはオルコメノスの王であり、イノーはその妃である。

使用人（ 姿はなく、遠くで響く声として ）おーい坊主どこだー。もう午後からの仕事が始まる時間だぞー。どこかで寝てでもいやがるのかー。

イノー（ ディオニュソスに向かって ）あなたがディオニュソスなのね。セメレーの子だという。

ヘルメス　そうだ。この子がゼウスとセメレーの子、ディオニュソスだ。お前たち夫婦には、この子に、人間らしい暮らしをさせてやってほしい。

イノー　もちろんです。私が一番かわいがっていた妹の子供ですもの。ねえディオニュソス、私がどんなにあなたに会いたがっていたか分かる？

ディオニュソス（ 照れながら ）ん、えー、えーと、あの、伯母さん、って呼んでいいのかな。

イノー　ええ。

ディオニュソス　伯母さんは、どうして僕のことを知ってるの？　　お母さんは、まだお腹が大きくならないうちに死んでしまったんでしょう。だとしたら、お母さんに子供がいたことなんて、誰も分からないはずなのに。

イノー　ベロエが見ていたわ。

ディオニュソス　ベロエ？

イノー　ええ、ベロエはセメレーの乳母だった人で、彼女は、セメレーの妊娠から死までを全て見ていたの。そして、妹の不審な死についてカドモス王から尋ねられた彼女は、その何もかもを正直に話したのよ。

ディオニュソス　その話を聞いて、みんなが信じたんですね。

アタマース　いや、そうじゃない。信じたのは、ポリュドーロス一人だった。

イノー　あのねディオニュソス、私たちは四人姉弟なの。私、アガウエ、セメレー、そして弟のポリュドーロスのね。

ディオニュソス　はい。

イノー　その中で、アガウエと父は、セメレーとゼウスさまの逢瀬も妊娠も信じなかった。それどころか、妹は誰か下賤の者と通じて子供を宿し、それを大神のせいにしたために落雷の罰を受けたと考えたの。二人は、あまりセメレーのことを好ましく思ってなかったから。

ディオニュソス　ひどい。

アタマース　だがポリュドーロスだけは、セメレーを信じたのだよ。

イノー　そしてポリュドーロスは、ここにも手紙を送って、私に事のあらましを報せてくれたの。もちろん私も信じたわ。妹がそんな嘘をつくような子ではないことは、誰よりも私が一番知っているし、何より私は、セメレーのことが大好きだったから。

アタマース　そしてまたポリュドーロスは「セメレーが不死なる神の子を宿していたとすれば、姉さんが死んだとしても、子供のほうは、どこかで今も生きているに違いない」とも手紙に書いていた。

ヘルメス　だからイノーは神々に祈ったのだよ、ディオニュソス。「どうかセメレーの子供に会わせてくれ」と。

イノー　ええ。

ヘルメス　そして、その祈りが神々全体に届くまえに、パッと掴み取ったのが私だった。なにしろ神々全体のうちには、あのヘラ女神だって含まれている訳だからね。ハハ、危ない危ない。

ディオニュソス　その結果として、あなたに連れて来られた僕がここにいる。そういう事なんですね。

ヘルメス　ま、そうだな。君が子鹿をやってる間にも、情勢は色々と動いていたっていうことだ。どうするディオニュソス。ここで暮らすことを受け入れるかね。

ディオニュソス　これまでの話を聞けば、僕がここから去っていくのが忘恩の行いであることは明らかです。

イノー　それじゃ、あなたと一緒に暮らせるのね。

ディオニュソス　こちらこそお願いします。

ヘルメス　よし。では、私は行くとしよう。アタマース、イノー、ディオニュソスを頼んだぞ。（ ヘルメス退場 ）

王家の団らん

　ヘルメスがいなくなった寝室に、イノーとアタマースの子供たちが招かれる。外では未だに使用人が徒弟を呼び回っている。

使用人　本当に、どこへ行っちまったんだ。オーイ、お前が梯子を押さえてくれないと、垣根の手入れが出来ないんだよ。さっさと出てきてくれー。

アタマース　ディオニュソス君に、私たちの家族を紹介しよう。子供たち、入っておいで。

〔レアルコス、メリケルテース入場〕

イノー　レアルコスは七歳。メリケルテースは五歳だから、ディオニュソスと一緒ね。きっといいお友達になれると思うの。

アタマース（ 我が子たちに ）お前たちのイトコだよ。ご挨拶なさい。

レアルコス・メリケルテース　はじめまして。

ディオニュソス　はじめまして。

アタマース　しかし、神の子と比べると、人間の子供はあどけないというか、幼いな。レアルコスまでが、ディオニュソス君の弟に見えてしまう。

ディオニュソス　この子たちの顔、なんだか僕に似てるような気がする。

イノー　二人とも私似だから。それで私とセメレーが似てるから。

ディオニュソス　伯母さん、お母さんに似てるの？

イノー　ええそうよ。一時期はそっくりだと言われたわ。

ディオニュソス　あの……その、お願いがあるんだけど。

イノー　なあに。

ディオニュソス（ イノーに小さな声で ）ちょっとだけ抱き着いてもいいですか。

アタマース（ 二人の子供たちに ）お前たちは別の部屋で遊ぼうな。

〔アタマース、子供たちを部屋の外に連れだす〕

イノー　来なさい、ディオニュソス。

〔ディオニュソス、座っているイノーの膝に、自分の頭を乗せる〕

ディオニュソス　あったかい。

イノー　セメレーもきっと、あなたにこうしてあげたかったでしょうね。

ディオニュソス　本当に？

イノー　もちろんよ。なぜ泣いてるの？

ディオニュソス　分かんない。分かんないけど……

アタマース（ 一人だけ戻ってきて ）泣きたいよな。分かるよ。

〔ひとしきりの静けさのあと、また使用人の声が響く〕

使用人　オーイ、どこだー。面倒かけるのもたいがいにしろー。

イノー（ディオニュソスの頭を撫でながら）あのねディオニュソス、あなたが喜ぶと思って私、テーバイから、セメレーの荷物を送ってもらってあるの。その中には、子供の頃の妹の服なんかも入っていて、ちょうど今のあなたの身の丈に合うものも幾つかあるわ。

ディオニュソス　母さんの服？

イノー　そう。それでね、変に思うかもしれないけど、私たちは、あなたにその服を着てもらいと思ってるのよ。

ディオニュソス　僕が女の子の格好をするということですか。どうして？

アタマース　これは私からの提案なんだ。いや、ここにいる限りは大丈夫だと思うんだが、念には念を入れて、ヘラ女神の目を晦ましそうと思ってね。

イノー　そうなのよ。

アタマース　つまりね、オルコメノスの王家に一人の子供が加わったことは、早晩に周知の事実になると思うんだ。だが、その子供が男の子となると、あの聡いヘラ女神が、それをディオニュソス君であると勘付いてしまうような気がするんだよ。

ディオニュソス　いかにもありそうな話ですね。そして、新しい家族が女の子であれば、あなたが言うような心配はなくなるかもしれません。

イノー　ええ、そうなの。あなたにとっては面倒な話になるかもしれないけど、それでもセメレーの服ならば、我慢して着てもらえるかなと思って。

ディオニュソス　構いません。誰よりもヘラの恐ろしさを知っているのが僕ですから。

アタマース　ではお願いしよう。

ディオニュソス　ええ。ただ……

イノー　そうね。（ディオニュソスの頭を撫でながら）今はもうしばらく、このままでいましょう。

ディオニュソス　ありがとう。

〔まどろみの中、またしても使用人の声が響く。彼は探していた徒弟を、ようやく見つけられたようである。ところが、その徒弟は、なんと王宮の屋根の上にいたらしい。そこは寝室からもほど近い場所である〕

使用人（叫んで）そんな所にいたのか！　なにを呑気そうに座っていやがる。いや、それよりお前、どうやって、そんな高いところに登ったんだ。

〔徒弟、両膝を台に、頬杖をつきながら空を眺めている〕

徒弟（独白）私も舐められたものね。場所がテーバイではないから。性別が男ではないから？　そんな事ぐらいで、私がディオニュソスを見失う訳がないじゃないの。（立ち上がりつつ）私はもうここにいる。ディオニュソスを見つけてる。（すっかり立って）そしてもう、ゼウスの汚らわしい息子を苦しめるための算段をはじき出している。さあ、地下の世界に行こう。そこであの女神に会うのだ。あの敵にしたら誰よりも恐ろしい「復讐の女神」に。

使用人　オーイ、お前、そんな高いところから、どうやって降りるつもりなんだ。あっ、

何のつもりだ。ダメだ、早まるな。俺が行くまでそこで待ってろ。ワッ！

〔徒弟、屋根から飛び降りる。使用人は目をふさぐ。徒弟は地面に吸い込まれる〕

使用人　あれ、音がしないぞ。あいつが消えちまった。どうなってるんだ？

アタマース（ 窓から ）なんだ叫んだりして。うるさいぞ！

使用人　申し訳ありません。でも王さま、おかしなことに徒弟のガキが、屋根から飛び降りたと思ったら、そのまま消えちまったんです。

アタマース　何を馬鹿げたことを言ってるんだ。脇の茂みから近づいてくるのが、そのお前の徒弟ではないのか。

〔徒弟が目をこすりながら、使用人に近づいてくる〕

使用人　どうなってるんだお前、さっき屋根から落ちたのに。

徒弟　何のことですか。それよりもすみません。何だか分からないんですけど、とにかく寝過ごしてしまったのは確かみたいです。

使用人　屋根でか？

徒弟　屋根なんかで寝る訳ないでしょう。そこの茂みですよ。

使用人　じゃあ、俺が夢を見てたのか。

徒弟　夢なら僕も見てましたよ。ひどい悪夢でしたがね。このオルコメノス王国が一日で滅びてしまう夢です。もちろん正夢だなんて思わないですけど。

使用人　当たり前だ、バカが。それより行くぞ。垣根の手入れをするのに、お前に梯子を支えて貰わなくちゃならん。

徒弟　え、でも、もう日が暮れそうですよ。

使用人　お前のせいだろうが！　行くぞ！

徒弟　はいっ！　すみません。

〔使用人と徒弟、退場する。暗転〕

戯曲　ディオニュソス　闇の神性　I

著　　正道

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社